新潟日報（夕刊）
2007年(平成19年)10月17日（水曜日）

晴雨計

父のこと

私の父は一言で表現するならば〝猪突猛進〟。なんとも賑やかで騒がしい人です。

趣味にはとことん没頭するタイプで、釣り、盆栽、キノコ狩りなど、プロ顔負けの腕前になるほどのめり込みます。今でも昼間は毎日どこかに出掛けていて、お客さんの「お父さん、元気かい？」の問いかけに、「はい。海に山に畑に駆け回っています！」と答えることができるのは誠にありがたいことだと思います。

思い立ったら即、行動で、私が東京で大学に通っているころ、父は町興しの活動で随分と奔走した時期がありました。当時は、無謀としか思われなかったこのプロジェクトに没頭したエネルギーは計り知れず、果てはバチカンに出向いてとうとうローマ法王との謁見まで実現してしまいました。この奇跡的な顛末は、私も何十回と聞かされて頭にシーンが浮かぶほどです。

普段はそんな元気な様子しか浮かびませんが、重い病気で入院した時期もありました。大ケンカしたこともしょっちゅうで（これは今でもありますが）、困ったものだと思います。しかしながら、子供のころから父はどんな時にも「女の子のくせに」とは言わず、何かあれば「やってみろ」でした。おかげさまで、〝おしとやか〟には縁遠い人間になってしまいましたが、これはまぁ、本人の資質でしょうか。

一方、そんな気性の半面もありました。私が東京で就職して蔵の跡取りが空白になった数年間、父はしばらく気に病んでいた様子でしたが、結局「戻ってこい」とは口にしませんでした。家族には言いたい放題だった父の数少ない沈黙。私が「蔵に帰る」と告げた時も、一言「そうか」と返しただけでした。〝猪突猛進〟の中に見た親心。子供の心には「なかなか」と映ったものです。

今日も釣りだキノコだと、元気にしている父の姿を眺めつつ、どの遺伝子が私に託されたのか、とても気になるのでした。

尾畑　留美子（尾畑酒造常務取締役・佐渡市）